

学生の研究成果発表の場
地域社会研究会



弘前大学大学院 地域社会研究科 ニュースレター

弘前大学と 地域づくり

VOL.

09

2017

2016年度公開セミナー



博士論文公開審査会



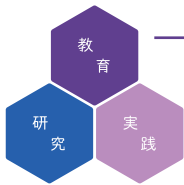
平内町藤沢地区での
ワークショップ風景

あおりツーリズム創発塾の
まちあるき開発プログラム



CONTENTS

- 1 地域社会研究科とは
- 2 地域社会研究科の“教育”と“研究”
- 3 地域社会研究科の“地域との連携”



地域社会研究科とは

研究科長あいさつ

弘前大学大学院
地域社会研究科長



北原 啓司

地域との連携から真の地域創生へ

その名称の通り、地域社会との関係性が非常に高い本研究科では、地域との連携をさらに強化しながら、地域に対して実質的な貢献をしていくことを考えた実践を続けてきています。またそれは、我々研究者の専門分野においても大きな意味のある経験となっていきます。ここ数年、毎年コンスタントに、青森県からの様々な受託研究を継続的に手がけてきています。それは、単に県と我々との関係性の強化だけではなく、首都圏の学生たちのインターンとしての受け入れや、県内の農業従事者、あるいは観光関係者との連携の幅と深みをさらに増すことになってきています。そのおかげで、研究科の専任教員への、様々な自治体からの研究会講師やワークショップのアドバイスなどの依頼が、次々に舞い込んでいます。

大学院は、修業年限を終えてしまうと、それで大学との関係性が弱まってしまふのが一般的ですが、本研究科の場合、学位を取得後も、あるいは単位取得後に学位取得を引き続き目指す形で、客員研究員が数多く在籍しており、上記の地域との連携による研究プロジェクトにおいてもそれぞれの力量を十分に発揮していただいております、研究科長としても大変心強いところです。

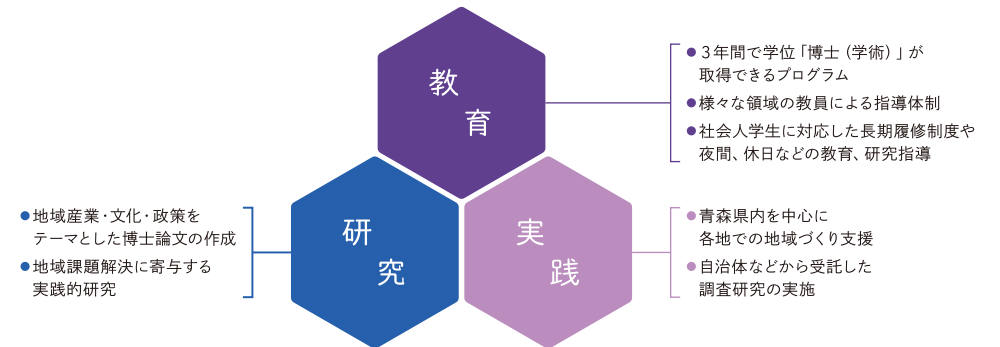
さらに特筆すべきは、2016年度からスタートした大学院レベルの連続公開講座「地域社会研究科公開セミナー」を、今年度も引き続き実施させていただくことです。社会人入学の動機付けとして設定した講座ですが、昨年度はその成果として実際に入学にまでつながるケースも生まれました。今年度は、大学での開催ではなく、八戸市において、県外の方々を受講も広く受け入れる形で2日間の集中講義として開催し、また受講生と教員との交流もはかることとなります。

我々、弘前大学大学院地域社会研究科は、積み上げてきた地域との連携をさらに持続させつつ、新たな展開を目指しながら、真の意味での地域創生につながる成果を、全国に向けて発信していく所存です。これからも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

高度専門職業人の養成

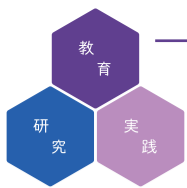
地域社会研究科は、活力ある地域社会の実現に積極的に貢献することを目的に、地域が抱える特有の課題に具体的に対処する人材を養成し、実行性のある研究成果を生み出す教育研究機関として2002年度に設置された博士後期課程の研究科で地域産業研究・地域文化研究・地域政策研究の3講座から構成されています。

働きながら在籍できる環境を整えていることが特徴で、3年間の学習と研究及び博士論文の作成によって「博士（学術）」の学位を取得できる指導体制となっています。さまざまな分野で活躍中の社会人も多数在籍しており、修了生はそれぞれのフィールドで高度専門職業人として活躍しています。



地域との連携

地域社会との関係性が高い本研究科では、受託研究や受託事業を通じて自治体関係者や地域住民との連携を強化し、研究科教員のみならず、大学院生およびOBとともに地域課題解決にむけた取り組みを実践しています。



地域社会研究科の“教育”と“研究”

教育課程と授業

3年間で学位（博士）が取得できるプログラムで、「必修」、「選択科目」、「演習」、「特別研究」の授業科目による授業、並びに「研究指導」からなる地域政策立案能力志向型の教育過程となっています。

また、社会人学生が多数在籍している本研究科では、社会人学生の実情に応じた夜間、休日などの教育研究指導体制をとっています。

授業紹介① 地域政策形成論（必修）

准教授 土井 良浩

1960年代に市民・住民運動が起こって以来、行政の計画づくりへの市民参加、市民と行政の協働事業の普及など、地域政策は中央集権下で進められるものから地方自治への移行を経て、市民の生活基盤やニーズに基づきつくられ実行されるものに変化しつつあります。この授業では、現代における市民主体の地域政策づくりの考え方や手法を習得することを目標としています。各回の前半部分では、市民主体の地域政策づくりの歴史的展開や市民参画の仕組みなどにかかわる講義を行います。後半部分では、市民が主人公となる地域政策づくりの現場に必要な「ファシリテーション」の考え方や「ワークショップ」の基本的技術習得のための演習を行っています。



演習の様子(ディスカッション)



演習の様子(プレゼンテーション)

授業紹介② 調査方法論（選択科目）

准教授 平井 太郎

互いに研究方法もフィールドも異なる大学院生のみなさんが「地域社会研究」としての共通の方向性を共有できるように、同じフィールドスタディをしたり、同じ方法論をもとにした研究報告をしたりする授業です。

フィールドスタディでは青森県鯉ヶ沢町や七戸町などを、また方法論では『新しい野の学問』の時代へ』などをとりあげ、それぞれでの学びが博士論文の主要な構成要素に直結していきます。



フィールドスタディの様子

授業紹介③ 研究方法論（選択科目）

教授 佐々木 純一郎

研究論文とは、読者に研究内容を説明するものです。博士論文ともなれば、数百ページの分量になる場合もあります。膨大な分量になると、その一部分だけをみれば説明ができていても、全体の最初と最後がうまくつながらないという困った事態が生じることもあります。読者に説明する前に、まず書き手の側が研究内容を明確に整理することが大事です。地域社会研究科には多くの研究分野がありますが、どのような研究分野にも共通する土台が研究方法論です。すでに研究能力に自信がある方でも、初心に戻って学問を究めていただければ幸いです。



Skypeを用いた遠隔授業 (PC画面は仙台市在住の社会人学生)

博士論文題目一覧

※2002年の研究科設置以来、様々な分野の学位論文が提出され、博士(学術)取得者は40名を超えています。

2004年 「ナッシング・リスクマネジメント」の現状分析を通じた「看護倫理」の役割に関する研究 --精神科看護の現場に焦点を当てて-- 石崎 智子	看護者の倫理的感性育成に関する研究 工藤 せい子	農業地域における自然環境管理の研究 --岩木川下流部のオオセッカ繁殖地を事例として-- 竹内 健悟	2005年 少子高齢化社会のホスピスに関する研究 --中国ホスピスへの伝統文化の導入を焦点に-- 張 長安	青森県の転作水田におけるアピオスの展開に関する研究 小笠原 康雄	地域振興策としての整備新幹線構想が持つ問題点と可能性 --東北新幹線・盛岡以北を中心に-- 柳引 素夫
2006年 高齢社会移行期における中国の高齢者教育の現状と課題 --都市部老年大学を中心に-- 程 栄華	日本近世国家と蝦夷地アイヌ社会の関係秩序 --十七世紀後半から十九世紀半ばまでの紛争と危機を中心に-- 市毛 幹幸	近世-近代における鉱山と周辺地域に関する研究 土谷 絢子	2007年 俳句の地域性と国際化 --台湾俳壇を中心に-- 沈 美雪	社会教育における「婦人教育」の衰退とその要因 --男女共同参画及び生涯学習との関係を中心に-- 一條 敦子	岩手県経済の安定性・定量的研究 :地方自治体の地域産業政策の展開 野崎 道哉
2008年 養護教諭の慢性疾患の子どもへの支援に関する研究 --因果的構造モデルの構築-- 葛西 敦子	2009年 地方社会における一次産品を中心とした地域ブランドの形成手法に関する研究 --地場産業の活性化を視野に入れた地域ブランドの価値と形成手法の考察を中心に-- 石原 慎士	Education System Innovation for Regional Economy and Social Development: Revitalization of Lowell, Massachusetts 清 剛治	要支援親子への支援の「つなぎめをつなぐ」保健師の活動に関する研究 --3歳児健診から就学まで-- 北宮 千秋	リンゴ搾汁残渣の新規用途開発に関する研究 高橋 匡	2010年 土木リテラシー促進に寄与する広報媒体活用に関する研究 --「土木の絵本」と「土木偉人アニメーション映像」による展開-- 緒方 英樹
道徳性を育むための「形成」過程の創造と道徳の時間の位置づけに関する研究 毛内 嘉成	「介護実習」をめぐる学校と施設の協働関係の構築に関する研究 --福祉系高等学校における「介護実習」への提言-- 田中 泰恵	2011年 医療通訳の現状と課題に関する研究 --地方都市における医療通訳の必要性と認定制度の整備に関する提言-- 工藤 規会	高等学校における「親性準備教育」の在り方に関する研究 --キャリア教育としての「親性準備教育」実施モデルの提案-- 玉熊 和子	高齢者の健康寿命の延長に関する研究 --地域で暮らす高齢者が主体となった介護予防運動を推進する方策の提案-- 福岡 裕美子	2012年 文部科学省による放課後子ども教室事業のあり方に関する研究 --「子どもの社会教育の中核」としての視点から-- 猿渡 智衛
2012年 近代の青森県における企業家ネットワークの研究 --企業家ネットワークを構成する企業と企業家への視覚化、数値化の視点から-- 雨 勉	2013年 近世日本の領土権と民衆 --弘前藩領の災害対応を中心に-- 白石 睦弥	2013年 現代中国の社会系教科における経済教育に関する研究 --社会主義市場経済下での経済認識と経済的価値観の統一的形成-- 徐 小淑	2014年 近世北奥地域における造船界の歴史的動向 石山 晃子	特別市制運動の基層と今日的意義 --横浜市神奈川からの分離独立史の検証を通して-- 橋田 誠	2014年 明治前期における学制改革の要因研究 西 敏郎
2014年 東北日本内帯北部の海跡湖における完新世の地形変化と湖水環境変遷 葛西 未央	知識の習得に重点を置いた道徳教育の研究 --人間行動の自動化に基づく授業開発-- 鎌木 浩	2015年 都道府県別の二酸化炭素森林吸収量・排出量及び産業廃棄物移動量推計等から考察した環境に対する地方の貢献 藤田 武美	2015年 街なかまちづくり活動におけるプロセス支援の方法論に関する研究 工藤 裕介	「民俗芸能」の「現在」 --生活の中の実践と客体化-- 下田 雄次	2015年 自律的動機づけに関する有機的統合理論と基本的心理的欲求理論の統合的検証 吉崎 聡子
2016年 成人音における合成音を用いた在宅吃音訓練法に関する研究 小山内 肇子	小学校社会科における価値判断の授業開発 --包摂主義を基軸とした価値類型の有効性-- 秋田 真	2016年 地域モビリティを育てる「Co交通」の形成に関する研究 村上 早紀子	2016年 青森県産食材の介護食への利用に関する研究 早川 和江	知的障害者スポーツにおけるマネジメントモデル構築に関する研究 --若年層ボランティアの活動継続性向上を企図して-- 大山 祐太	2016年 地域産業研究講座 地域文化研究講座 地域政策研究講座

修了生からのメッセージ

働きながら学ぶからこそ見えるものがある

「このままでは記事が書けない!」。地方紙記者として“整備新幹線問題”に向き合い、痛感したのは2002年でした。『聞き書き』で呈示できる世界観の限界にぶつかりました。自ら学び、考え、成果を記事に織り込める『専門性』の必要性が身に染みしました。

地域社会研究科の門を第1期生として叩いたのが40歳になる年。指導いただいた先生はじめ皆さまに磨かれ、何とか学位を手に入れました。その後も「実社会に揉まれながら学んだ大学院生だから見えるもの」を追い続け、50歳で大学に移りました。

いつからでも、いつまでも学べます。ぜひ、体験して下さい。



柳引 素夫さん
青森大学
社会学部教授
2006年3月学位取得

地域を実践的に学ぶということ

“地域〇〇”という言葉が溢れ、地域への関心が高まる中、過疎地域などマイナスなワードも現れています。地域社会研究科には様々な専門分野の先生や学生がおり、授業、研究会や外部講師を招いたフォーラム等を通じて、多様な視点から『地域』を学び考える機会をいただきました。

私の研究テーマである“地域公共交通”に関しては、指導いただいた先生に全国各地に飛び出し視座を得る機会をいただき、論文執筆や日頃の研究に対して熱心にご指導いただきました。また、諸先生方の導きで県内の地域課題解決の実践に参画できたことは、研究に取り組むエネルギーとなりました。



村上 早紀子さん
弘前大学大学院
地域社会研究科
客員研究員
2017年3月学位取得

自治体から受託した研究や事業

人口減少に対応した地域づくり研究

2014年から青森県とともに人口減少が心配される集落の地域づくりに研究科を挙げて取り組んでいます。研究科だけでなく人文社会科学部や農学生命科学部で地域づくりを専門とする教員に呼びかけているほか、大学院生、研究科OBの研究の場としても積極的に活用しています。そのフィールドは徐々に増え、青森県全域、北は下北の脇野沢地区から南は新郷村まで、東は三沢市根井地区から西は弘前市常盤野地区まで広がっています。

七戸町白石地区の取り組み

七戸町白石地区は八甲田山の麓、青森市からみちのく有料道路を抜けて、最初に現れる集落です。5つの集落が散在し200世帯ほどが暮らしています。もとは牧草地などが広がっていましたが、1990年代に圃場整備がなされ水稲や野菜が作られています。1980年代まで現役であった旧白石小学校の跡は、七戸町中央公民館白石分館としてコミュニティ活動の場となっています。



集落の宝物は山の恵みと芸能

2014年、私たちは青森県、七戸町と共同で集落のビジョンを共有するための集落点検を行いました。研究科のカリキュラム「調査方法論」の一環として、大学院生6名とともに、この地域で末永く残していきたいものはなんだろうと1軒1軒のお宅を聞いて回りました。その結果、地域の宝物は「山の恵み」と「芸能」だということになり、それらをしっかり後世に伝えたり他地域の人たちと分かちあうにはどうしたらよいか、その年の冬から話し合いを始めました。

山の恵みを分かち合う

「山の恵み」とは八甲田山麓の豊かな森と清らかな水に育まれた山菜やきのこ、そしてヤンキパタと呼ばれる住まい周りで育てられている四季折々の野菜のことです。七戸町が誇る道の駅の直売所には年間売上の最低金額が定められていたこともあり、地域独自の直売所を立ち上げては！と考えたものの、それぞれに忙しく、また適当な場所もないといった難問にぶつかりました。そこで研究科OBを中心に、無人での運営や公有地の提供の可能性を探って、2015年7月、直売所のオープンにこぎつけました。

あまりの人気ぶりに品薄になってしまふ！という悩みを、季節の草花をポット苗にして販売するといったお母さんたちの機転で乗り越えるなど、悩みはつきないものの地域のみなさんの創意工夫で3シーズン目を迎えています。

特筆すべきは販売額の一部を地域の活動のために積み立てていること。「白石トラスト」と呼んで、子どもたちの活動のために寄付したり、地域全体の盛り上がりに一役買っています。

多世代交流を促す芸能

もう1つの地域の宝である「芸能」。当初は1集落で伝えられる文化財「上原子剣舞踊り」をどう子どもたちに継承していったらよいかにフォーカスしていました。2015-6年には、七戸町の呼びかけて土曜日の学童保育に剣舞踊りを教えるに出向くなど、新たな担い手の掘り起こしを進めています。さらに地域に伝わる盆踊りも継承していくことになりました。

この地区では近世から伝わる盆踊り「ナニヤドヤラ」と、北海盆唄のルーツとされる盆踊りの唄「チャンコチャヤノカガ」、さらに小学校閉校時に作られた新民謡「白石音頭」、そして最近、子どもたちが学校で教わる「ミヨコ節」と、世代ごとに親しんできた盆踊りが異なるのです。これじゃみんなて踊れない！と盆踊り大会も中止されていたのですが、逆に世代間で教え合う世代間交流をテーマにすればいいのではと、2015年8月から復活しています。

この地域の人たちの教え合いをリードしているのも研究科OBです。彼はここでの調査も重要な素材として博士号を取得、その後も地域に通いづける津軽と南部の芸能研究＝実践の橋渡し役にもなっています。

平内町藤沢地区の取り組み

藤沢地区は平内町にある約300人110世帯の農業集落で、スーパー、病院が徒歩圏内にあり青森市内にも車で30分程度の距離に立地しています。コミュニティセンターを拠点として、町内会を中心に公民館、婦人会、子供会などの地域活動が盛んです。

青森県庁、平内町役場の協力を得ながら、地域社会研究科では教員、大学院生や研究科OBがワークショップ、現地調査や勉強会を実施するなど、藤沢地区の取り組みを4年間にわたって支援してきました。

1年目 >> 地区の現状調査と将来イメージ・活動アイデアづくり

1年目は、まず、地区の資源や課題、住民の今後の居住意向などを調査しました。ヒアリングやワークショップにより、山菜などの自然の恵み、丘からの風景、神社・獅子舞などの歴史文化、優れた子育て環境、住民間交流などの資源と、人口減少、雇用の少なさ、農業後継者不足、耕作放棄地の増加、獅子舞後継者不在などの課題が明確になりました。また、先進地である新郷村川代地区などを視察し「自分達にもできる」と確信を得ることができました。以上の成果を住民集会で共有する機会をもった後、地区の将来像・今後の活動方針と活動内容を定め【表】、地区内外に取り組みを発信する小冊子もつくりました。

【表】藤沢で定められた地区の将来像・活動方針・活動内容

I. 将来像	
①住民がいつまでも若々しく生き生きと光り輝ける、しごと・ゆとりを持ち、健康である集落	
②皆で和気あいあいと楽しく、地域のつながりが絶えない集落	
③地区の外の人も魅力的で、新しい人やアイデアを受け入れる開かれた集落	
II. 活動方針（活動の心構え）	
①やれる人達が無理のないことをする	
②目の届く範囲の身近なものを活用して、それをお小遣いに変える	
③多世代の人々が集まり、交流する機会を増やす	
④藤沢にゆかりのある外の人との交流の機会を増やす、つながりを強くする	
III. 活動内容（すぐできる、やりたいもの）	
①野菜や山菜等の無人販売所を設置する	②娯楽・交流のため「どぶ引き」の復活
③休耕田・耕作放棄地にそばを栽培し、そば打ちを通じて交流する	④山菜や舞茸等を栽培して皆で食べる
⑤健康教室を実施する	⑥獅子舞の継承に取り組み



ワークショップ(今後の活動検討)



成果発表(新年会にて)

2年目以降 >> 活動の実施とその後方支援

2年目からは活動実行段階となり、研究科は進展状況を検証するワークショップや新たな活動立ち上げに向けた勉強会開催などの支援をしました。まず地区にも自生するハタケシメジのブランド化を目標に、県民局や県産業技術センターの助言を得ながら栽培・収穫し調理レシピの開発もしました。また、川代地区から苗を分けてもらったハックルベリーを休耕地で栽培・収穫してジャム作りを行い、川代で盛んなPPバンドカゴ作りの教室も始まりました。川代地区とは、祭りに応援参加するなど相互交流がスタートしました。さらに、サツマイモ掘りや親子クッキングなど子どもの体験機会をつくり、役場や病院の協力を得て生活習慣病や認知症予防などをテーマとする「健康教室」を実施しました。

3年目には、研究科OB及び大学院生が地元産農作物直売所の運営体制づくりを支援し国道沿いの空き倉庫を改装して「直売所ふんちゃ」をオープンさせ、獅子舞の存続に向けて囃子の楽譜作成や後継者育成のための練習会を実施しました。

4年目は、県内外の大学生を地区に迎え入れて地域づくりインターンシップ事業も実施しました。1年目の計画の大部分が実施・着手され、ハタケシメジ栽培や直売所の運営も軌道に乗りました。

今後は、地区の活動をどうやって次世代に繋いでゆかか考える場を設ける予定です。



「直売所ふんちゃ」オープン

横笛生演奏による獅子舞お披露目

地域づくりインターンシップ

農山漁村「地域経営」事業

青森県が2012年から進めている農山漁村「地域経営」事業。その大きな特徴は、農業、漁業にかかわるキーパーソンたちが集まって「マネジメント部会」を作ることです。次世代育成のために何をしたらいいのか部会で決めたことに県が助成し、またその成果を部会で検討して次の手を考えるというボトムアップ型で、しかもPDCAサイクルを回す仕組みが埋め込まれています。

ですが、今までにない画期的な仕組みにだけに、どう議論していいのかわかりにくいものです。どうしたらせつかくの仕組みを活化化できるのか。2016年度から青森県や地域のみなさんと私たち研究科を中心とする研究班が取り組んでいるミッションです。

研究班の1人は、実際に「マネジメント部会」に付箋で議論を進めていくワークショップの手法を持ち込んで、どういう方向づけや整理をしていったら、あるいはどういうメンバー構成をしていったら議論が弾むのか、そして、自分たちの成果を冷静に見極め、次の一手を考えることができるのか研究し始めています。

これらの研究成果を踏まえ、「マネジメント部会」の進め方のガイドラインや地域の人たちを巻き込む研修プログラムのあり方を提言・実現しようとしているところです。



研究成果の報告



農圃視察研修風景

あおもりツーリズム創発塾

2012年度から青森県とともに進めている観光人材育成プログラム。一般的な講座と大きな違いが2つあります。1つは、観光商品化を考えている現場の人たちを一本釣りして商品化まで持っていき実践的なワークショップを重ねること。もう1つは、目先の商品化を考えずにじっくり議論するシンポジウムを設けていることです。

ワークショップでは、弘前市が先導するまちあるきや体験型観光の取組を津軽一円に広げてきています。鶴田町のつるた街プロジェクト、黒石市の横町十文字まちそだて会、板柳町の板柳まちプロジェクト、そして中泊町のいなかどまり会と、着実にその体験型観光の担い手の輪は大きくなってきています。

さらにここ数年は、地域おこし協力隊のみなさん発のツーリズムもサポート。漫画・アニメをいかしたコンテンツ・ツーリズム、伝統行事にどぶづりつかるツアー、さらに津軽の食文化を堪能する場づくりも始まっています。そうした食文化に光を当ててきたのがシンポジウムです。「ソウルフード津軽」と題し、定型化された文化財化された郷土料理とも商品化が先行するB級グルメとも違う、ふだんの、そして懐かしい食文化を掘り下げてきています。



お山参詣モニターツアー



「ソウルフード津軽」シンポジウム

自治体職員・地域住民の声

いんでねえがふんちゃ

藤沢を活性化しようという地域の強い思いから自分達で創意工夫し色々な事業を展開してきました。青森県や弘前大学の応援が地域の人たちを奮い立たせ、これまで以上の団結力・行動力とパワーを発揮することができ、その結果、2016年7月に「直売所ふんちゃ」を僅か4ヶ月という期間でオープンしました。

朝の出荷時間は昔ながらの井戸端会議で地域の人たちの笑い声と笑顔であふれていて、「やれることから・楽しみながら・無理をせず・やれる人で」をモットーに元気と活力・魅力あふれる地域へと確実にステップアップしています。

まちを「つくる」から「そだてる」へ

私は2012年からまちづくり活動に携わってきました。その中で沢山の出会いがありましたが、中でも地域社会研究科の教員や学生との関わりが今の活動、考えを大きく成長に導いてくれたと思っています。

それまでの会議や活動は、闇雲に考え「面白そうだからやってみよう」などとざっくりとしたものでしたが、地域社会研究科で実施するあおもりツーリズム創発塾でのまちあるきやソウルフードシンポジウム企画に参加したことで街に接する態度が「つくる」から「そだてる」に変わって行きました。このような出会いを大切に、街をそだてる私たちがもっともっと成長していかなければならないと強く感じております。



平内町企画政策課主幹 亀田 亮さん



NPO法人横町十文字まちそだて会理事長 村上 陽心さん

2016年実施講義の様子



公開セミナーの開催

地域の社会人を対象に大学院レベルの学びの機会を提供するために、研究科の授業カリキュラムの内容を公開セミナーとして2016年度より開講しています。

2016年度は「人口減少社会における地域創生とは」をテーマに本学講義室で全4回開催し、各回研究科教員の視点により地域課題に着目した講義を行いました。全4回を通じて、青森県内外から自治体関係者、教育研究関係者、地域活動関係者など、約93人(累計)が受講し、各回セミナー終了後には教員のもとへ多くの質問や地域課題解決のためのアドバイスや協力依頼を求める受講者が集まり、また、受講者の中から本研究科への入学者が生まれるなど、大変有意義なセミナーとなりました。

2017年度は、青森県・岩手県・秋田県の社会人を対象に会場を八戸市へとうつし、講義とまちあるきを通して「ポスト地方創生」をテーマに2日間の公開セミナーを実施します。

弘前大学大学院地域社会研究科
2017年度 公開セミナー

「ポスト地方創生」
2017.10.21(土)・22(日)

講義① いま地域に必要な3つのマネジメント
北原 啓司 (教授/都市計画学)

まちあるき 研究科教員と八戸中心市街地の「まちあるき」を実施。

講義② 地場中小企業と社会的課題の解決
佐々木 純一郎 (教授/経営学)

講義③ 地域づくりワークショップの肝
平井 太郎 (准教授/社会学)

講義④ 市民主体の集いの場づくりによるコミュニティ創生
土井 良浩 (准教授/地域計画学)

相談会 地域活動の進め方や研究科進学などにかんする相談会を実施。

NPOひろだいいりサーチ

特定非営利活動法人ひろだいいりサーチは、地域社会研究科の教員や大学院生そして地域の皆さんが会員です。弘前大学学長が特別顧問を務めています。自治体や商工団体そして財団法人などから委託され、地域づくりのワークショップを開催する他、買物弱者などの課題解決をテーマとした調査を行っています。NPO活動を通じて地域社会研究科に入学した方もいます。地域の皆さんと弘前大学が力を合わせる機会をひろだいいりサーチは創っています。



買物弱者に関する調査場面(青森県深浦町の移動販売車)

弘前大学大学院地域社会研究科の
詳細はHPからご確認いただけます。

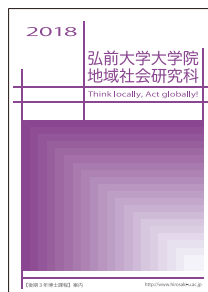
- 講座について
- 授業内容・シラバス
- 学位論文関係
- 担当教員一覧
- 入試・入学情報
- 研究紀要等刊行物



地域社会研究科のHPは
こちらからどうぞ >>



地域社会研究科案内 (PDF) を
ダウンロードいただけます。



ダウンロードは
こちらからどうぞ >>



お問い合わせ

- 地域社会研究科については 弘前大学学務部教務課 まで ☎0172-39-3960
- 入試については 弘前大学学務部入試課 まで ☎0172-39-3973 / 3193

弘前大学大学院 地域社会研究科 ニュースレター

弘前大学と地域づくり 第9号

発行日 | 2017年10月20日

編 著 | 北原啓司、佐々木純一郎、平井太郎、土井良浩

発 行 | 弘前大学大学院 地域社会研究科
036-8560 青森県弘前市文京町1番地
<http://www.hirosaki-u.ac.jp/Tlag/>